



確定印

人は、わかっていたことを、
他者の言葉でようやく信じる。

確信は、最初から内側にあった。

けれどそれは、
輪郭を持たずに浮かんでいた。

否定もできず、
そのまま留まっていた。

それは、依存ではない。
承認を求めているわけでもない。

決めてもらいたいのではなく、
保証が欲しかったわけでもない。

ただ、
自分の中にあるそれが、
どこまで現実なのかを、
まだ定めきれていなかっただけだった。

感覚は、
最初から形を持たない。

それは、
言葉になる前に現れ、
判断になる前に留まる。

確かにあるのに、
まだ輪郭を持たないまま。

そこに、
外から言葉が重なる。

一致する。

その瞬間、
内側に散っていたものが、
ひとつの形として現れる。

他者の言葉によって、
初めて確信する。

けれど、
それは委ねたのではない。

もともと、
そこにあったものが、
戻れなくなっただけだった。

信じたのではなく、
曖昧さが終わっただけだった。



一度、形を持ったものは、
もう曖昧には戻らない。

Edition — 存在の芯
別景：確定

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026